

令和6年度富山県水墨美術館運営委員会 議事抄録

令和6年10月24日(木)

富山県水墨美術館映像ホール

- 1 開会
- 2 委員長選出
- 3 議 事
 - (1) 令和5年度事業報告
 - (2) 令和6年度事業実施状況
 - (3) 施設の管理運営状況
 - (4) アンケート結果
- 4 意見交換
- 5 閉会

12名中出席10名(うちリモート1名)欠席2名

おもな発言

- ・今年の元旦の能登半島地震は大変驚き、富山県内の作家の方々のアトリエや作品にも損傷があったと聞いた。元旦でありながら、水墨美術館内での対応、施設や展示作品の無事の連絡には安心した。今年が開館25周年を迎えるということで、現在、館内に開館から25年間にわたる企画展ポスターが掲示されており、デザイン性もすばらしく、各展覧会に思い出もあり、これまでの歩みを感じ、感慨深かった。また企画展を見た後に常設展に入ると、改めてゆっくり鑑賞でき気分が落ち着く。賑わった企画展の後、ざわざわした気持ちに落ち着きを取り戻せることを実感した。いつも観覧者は熱心に鑑賞され、美術館の様々な試みや姿勢が伝わっていると思う。四館連携展示においては、改めて水墨美術館の展示室の良さを体感し、各館の所蔵品も大変素晴らしく見えた。今年度の水墨美術館が素晴らしい作品との出会いの場となり、私たちにその感動を与えてくれる機会となることを願う。

(A 委員)
- ・何とんでも今年の元旦の地震は心配した。元旦だったので職員の方も出勤しておらず、警備員の方だけだったそう。会期中だった超絶技巧展は、繊細で壊れやすい作品ばかりなので、状況を一刻も早く知りたいと思った。翌日、関係者と作品輸送担当者が県外から駆けつけ余震対策など対応されたが、幸いなことに作品の損傷はなかったようだ。ただ、監視カメラが故障していた。これを経験として、地震に対する危機管理体制を、さらにしっかりしたものにしていただきたいと思う。

(B 委員)
- ・元旦の地震は、開催中の展覧会のこともよく知っていたので心配した。取込み中だと思ったので連絡は控えたが、早い時期に被害がなかったという連絡をいただいた。設備の不備があったとのことだが、速やかに適切な対応をされたと思う。こういう時に館の力が発揮されるもので、こちらはしっかりされているというイメージを持った。現在開催されている摘水軒コレクション展にはたくさんの来館者があって、皆さんが興味を持たれていることがよくわかる。水墨美術館ではこれまでにあまりない、時代の幅を近世にまで広げた

展覧会だが、このような取り組みも続けると多くの方に来ていただけるのではないかと。博物館登録については、少し具体的な内容を盛り込むのはよいと思う。富山県には県立の美術館が2館あるので、その違いを出していくことも、とても良いこと。ただ、中期的なことも含めて少し大らかに考えたらよい。博物館法の改定はこれらを考えるよい機会ではないか。今後、この運営委員会でも報告し委員の承認を得て、館外に出していくとよい。

(C 委員)

- ・魅力ある展覧会というのは、地域から求められている文化施設の役目なので、遠くからも足を運びたいと思うような興味を引く内容で開催できるのは良いこと。開館の周年事業などで計画する大型企画展は、予算も含めて長い時間をかけて取り組まなければならないが、博物館登録も同様に時間をかけて準備していかなくてはならない。富山県は複数の美術館博物館があるので、それぞれの特徴を生かしつつそれらを明確に打ち出せるように、水墨美術館ならではの魅力を強く押し出せる目標設定ができるとよい。他の館とも情報交換、情報共有して進めてほしい。

(D 委員)

- ・アンケートの結果を見ると、子育て世代や若い人にとって、水墨画はハードルが高いと感じているのではないかと。子育て世代は、ファミリーパークにはよく出かけているだろう。ただ、夏場は屋外に出かけるのが難しいこともあるので、そういった時期に子どもたちの興味を引く展覧会や子どもを連れて来たくするような内容があると足を運ぶ機会になるのではないかと。

(E 委員)

- ・富山県美術展や越中アートフェスタなど、県の主催する展覧会では美術館職員も作家と一緒に活動する機会がある。博物館登録に対しての美術館活動方針を考える際、県内作家との関わりも、方向性の一つに入れていってはどうか。

(F 委員)

- ・本物を見る機会があるのはとても良いことで、たくさんの県民に見てほしい。特に昨年度の超絶技巧展では作品はもちろん感動したが、展示の仕方もとても工夫されていた。企画展示室だけではなく、常設展の一部も使い、特徴ある常設展示室（下保昭作品室）の雰囲気うまく利用しながら出品作品の魅力が引き出されており感心した。今後も色々な見せ方に取り組んでほしい。他にも、スケールの大きな作品の川端龍子展などを見られるのも美術館ならではの。スマートフォンの画面を見ているだけではわからない。特に若い世代は画面の写真で良いと思いがちだが、大作の魅力は美術館ならではのもの。もっと若い世代も見て感動してもらえると、画面とは違った新しい世界を体感できると思う。最近、解説の文字が大きく見やすくなった。常設展では、ワンポイントの見出しが興味を引き、来館者に寄り添ったコメントもあり大変好ましい。

(G 委員)

- ・展覧会ごとに開催されるギャラリートークがよかった。もともと一人で鑑賞する方が好きだったが、トークを聞いたら専門的なおもしろい話が色々あり、もっと作品を知ろうという深い気持ちが出てきた。SNSも頻繁に更新されており、いつも楽しみにしている。茶室の花やお菓子のこと、しだれ桜や庭などの季節のこと、学芸員実習の学生さんの視点から見たコメントなど、色々な情報が盛り込まれている。庭があつて茶室があつて展覧会が

あってミュージアムショップがあって、総合的に「生きている美術館」を感じる。職員の皆さんが一生懸命されているのが伝わってくる。みんな言わないかもしれないが、見ている人はちゃんと見ている。自分には収穫だった。これからも楽しみにしたい。(H 委員)

- ・コロナ禍で来館者が減ったというのはとても残念だったが、ここ最近持ち直しているのは嬉しい。現在開催中の摘水軒コレクション展は滅多に見られないコレクションで、前・後期展示替えがあることが予め分かっていたので、それを伝えると2回見たいと言われる方が多い。富山の方はフットワークが軽くてあちこち見ている方が多いが、特別な展覧会であることを打ち出すと、興味を持たれる人が多いように感じる。ただ、子どもが来館するには、静かすぎる印象がある。富山県美術館は子どもたちが多くて賑わっているので、夏休みなど子どもたちが来てくれると良い。美術館の方針もあるので思いつきは言えないが、子どもの書道展や水墨画展のようなこともあったら、子どもたちも来やすいのではないかと思う。(I 委員)

- ・他の会合に出た時などに、この美術館の運営委員として、水墨美術館の素晴らしいところを話すようにしており、広報する機会をいただいていると思っている。先ほども出ていたように、ギャラリートークを聞くと作品がより身近に感じるのも、そのこともみんなに話している。来館者は、非日常を楽しむことを水墨美術館に求めている。ゆったりとした時間が流れる世界観を感じていると思う。水墨美術館は高齢の方が多く、富山県美術館は子どもたちが多く来館しているが、2館それぞれの違いがあってよいと感じる。昨年度の川合玉堂展はたくさん来館があったようだが、すべてを見てもらうことはなかなか難しいので、自分の関心のあるものから広がっていけば良いと思う。(J 委員)

- ・水墨美術館から、「美術館は共生の場である」とのことだったが、その通りだと思う。ある地域では、学校の運動会が騒がしいという厳しい意見もある中、一人暮らしの高齢者の方に子どもたちが招待状を配って招待した。家族ではないけど「来てください」と招待するところから始めた例がある。美術館も、世代間格差も含めて、他を認める共生の場であるということだと思う。また富山にゆかりある篁牛人展を開催されたこともあるので、県内作家についての調査研究の必要性もこの美術館ならではの。温かい気持ちになる。中国に行った際、富山には水墨美術館があるじゃないか、と中国の方々が期待されていた。まだまだ未来があると感じた。(A 委員)

- ・美術館が25周年ということで、廊下にこれまでの展覧会ポスターが掲示されているが、この25年間にいろんな展覧会を開催されたことを改めて感じた。同時にポスターのデザインのことを考えた。水墨美術館では、県内のデザイナーにお願いしていると聞いた。今年度は富山県美術館で世界ポスタートリエンナーレトヤマを開催しているが、そこに水墨美術館の企画展ポスターが2点入選していた。地元のデザイナーに依頼し、こういう優れたデザインが生まれている。絵画や彫刻の作家だけでなく、こうしてデザインの人たちを育てているのがこの美術館ではないか。美術館活動の中でデザイナーを支援されていることは、デザイナーの周知にもつながることなので引き続き努めていただきたい。(C 委員)